

経験に勝る学びはない

人文学部 藤本 灯さん（平成 25 年 3 月卒業予定）

★インターンシップで社会と関わりながら物事を考える

大学生活における大きな挑戦の一つとなったできごとが、大学 1 年生の春休みから半年間に及んだインターンシップだった。生まれ育った高知県を離れ、新たな土地、横浜市にあるベンチャー企業へ向かうことは当時の私にとって大きな挑戦であり、同時に期待と不安でいっぱいになっていた。インターンシップの活動内容は、菓子製造販売の一貫業務。当初は知識もなければ技術もなかったため、毎日、現場で知識と技術を覚えていった。なぜ、インターンシップを行ったのか。一言でいえば、それは、自分の知らない世界をみたかったから。高校生の頃、高知大学のパンフレットに掲載されていたインターンシップの記事を見て以来、わたしも大学という枠組みのなかだけではなく、広い世界にいたいと思った。だから、私にとってインターンシップは社会との関係性を持ち、広い視野で物事を考えるための手段であった。

★自分が変わると環境が変わる

インターンシップを始めたころ、私は周囲の環境に不平不満を嘆いた。「なぜ評価してくれないの」「なぜ色んな仕事をさせてくれないの」。こんな不満ばかりをあげ、その上周囲のインターン生が仕事に追われて忙しく過ごしていることを羨んだりしていた。そんな風に自分が置かれている環境に満足できない日々が続いた。そんなとき、周囲の声があった。「環境に不満ばかりあげていても無駄である、自分からアクションをおこしてその環境を変えればいい」という言葉を受けた。はっと目が覚めたように感じた。相手や周囲の環境を変えることはとても労力が必要なことだが、自分を変えることはとても簡単なことである。考え方一つ、行動一つを少し変えるだけで、視野が広がる。そんなことに気づかせてくれる出来事であった。それからとても前向きに考えられることが身に付いた。そして、自分の置かれている環境を楽しめるようになった。これが私の中で最も変わったことであった。不満ばかりのインターン生活が、何ができるか、何をすべきか、と考えられるようになったことで明るくなっていったことをすごく印象深く覚えている。このようなターニングポイントを経てからのインターン生活は、充実したものであった。言い換えれば、置かれている環境のなかでどれだけ自分が楽しめるか、どれだけ自分の力を発揮できるか、と考えなければならぬと周囲の人の言葉に気付かされることがなければ、違ったインターン生活になっていたと感じる。

★経験に勝るものはない

このような経験を経てこそわかることがある、と振り返り感じる。何か物事を始めるとき、その背後には不安や躊躇は必ず存在する。実際に大学生活のなかで、新しいことを始めるとき、不安で仕方ないことは数多くあった。しかし、振り返り思うことは全ての経験に勝るものはないということ。やらずして後悔する以上に、この大学生活で多くの経験をして、多くを学ぶことができたことにとても満足している。